

各委員から事前にいただいた意見

1. 教科単元と関連づけた学習に対する支援

- ・ 境先生の授業内容を知っている教員も学内におり、活用してみたいという声もあるが、資材もなくやり方もわからない。実施したいと考えた時に、学校が使いやすい支援があると良い。
- ・ 地域の素材から作成した教科書が作成できるとよい。これまでのWGが行ってきた形で、教科書と関連づけて使える「素材」の提供では、湿原に興味のある人が使う範囲を超えることは極めて難しい。また、副読本としてしまうと、あくまで参考資料との位置づけが強くなり同様の課題が残る。
- ・ 学校でも電子化が進められており、電子教科書に関連づけて地域素材の情報を組み込んでいけると良い。
- ・ 教科書と同じ使い方が出来るものが学校では扱いやすい。指導要領との兼ね合いもあり、調整が難しい部分も多い。
- ・ 数時間のモデル授業を行うことができる学校は多くはない。15分程度のものから45分、90分と、複数の選択肢の中から学校が選べると良い。
- ・ トランクキットのような形で、資材、使い方等が一式になった学習資材を、拠点毎に貸し出す仕組みが構築できると良い。備品の管理、運営面で課題はあるものの可能性はある。

2. フィールド学習に対する支援(湿原へのアクセスが可能な学校を想定)

- ・ 移動の問題は釧路市内の学校では大きな課題であろうが、路線バスを利用して湿原に行ける学校もあり、そうした場所で実施する際に有効な情報、支援の仕組みがあると良い。
- ・ 湿原に行くことは大きなハードルで、これまで路線バスとしての利用が出来たからこそ湿原に足を運べたが、それが難しくなると、1回程度しか現場に行けない。釧路市内の多くの学校はこうした状況にあり、課題追求はインターネットに依存することになる。インターネットに答えは書いてあるが、学習がとても薄いものとなる。
- ・ 四季を通じて温根内に子ども達を連れて行くが、見るだけの部分が多い。湿原に下りてぬかみを経験する等、質の高い体験ができるフィールドがあれば、子ども達へのインパクトも違ってくる。
- ・ フィールド学習の題材としての湿原の適正、学力重視、教科増などの状況もあり、歩いていける範囲の身近な環境をフィールドに選ぶ流れとなっている。これらの課題を克服することができ、且つ、専門の人がついてもらえれば学校としてもやりやすい。プロとフィールドの散策を通して課題を意識し、調べ方などのフォローも得ながら進めることができればよい。いずれにしても、全域の学校というよりは、湿原に近い学校をターゲットとすることになる。
- ・ 事前、事後学習で子ども達が自身で調べることができる資料があると良い。大人向けの資料、WEBサイトがほとんどで、子どもが入っていける情報の量、質の資料があると良い。

3. 特別活動等における学習の促進

- ・ 夏休みの自由研究発表を活性化させてサイエンスフェアができると良い。地域への課題意識を持った子ども達を、こうした形で育てていくことも考えられる。
- ・ テーマの設定を湿原に関係するものに促す場合、自由研究の題材となる行事の案内を行うなど、子ども達の学習の支援が出来ると良い。場合によっては、新たにそうした行事を企画し、案内できると良い。
- ・ 遠足であれば、自然と触れ合うことを目的とできるため、取り組みやすい。
- ・ 社会見学でもフィールドに出る。教科書と関連した施設に行く場合が多いが、社会見学向けの湿原を題材としたプログラムを提案する価値はある。

4. 学校教員の関心喚起に向けた取り組み

- ・ 普段入れないフィールドに研修として入れると良い。教員の大半が観光地として開放している場所ではか湿原と接点がない。
- ・ 市町村では教育研究所を設置し、事務局は学校の校長または教頭職が担っている。理科部会に所属する教員の中には関心を持つ教員もいると思う。連携を図ることを検討すると良い。